主日礼拝説教「それでも善をもって応える理由」予稿

日本基督教団石神井教会　2023年7月16日

【旧約聖書日課】サムエル記上　24章8～18節

8ダビデはこう言って兵を説得し、サウルを襲うことを許さなかった。サウルは洞窟を
出て先に進んだ。9ダビデも続いて洞窟を出ると、サウルの背後から声をかけた。「わが
主君、王よ。」サウルが振り返ると、ダビデは顔を地に伏せ、礼をして、10サウルに言っ
た。「ダビデがあなたに危害を加えようとしている、などといううわさになぜ耳を貸され
るのですか。11今日、主が洞窟であなたをわたしの手に渡されたのを、あなた御自身の目
で御覧になりました。そのとき、あなたを殺せと言う者もいましたが、あなたをかばって、
『わたしの主人に手をかけることはしない。主が油を注がれた方だ』と言い聞かせました。
12わが父よ、よく御覧ください。あなたの上着の端がわたしの手にあります。わたしは上
着の端を切り取りながらも、あなたを殺すことはしませんでした。御覧ください。わたし
の手には悪事も反逆もありません。あなたに対して罪を犯しませんでした。それにもかか
わらず、あなたはわたしの命を奪おうと追い回されるのです。13主があなたとわたしの間
を裁き、わたしのために主があなたに報復されますように。わたしは手を下しはしません。
14古いことわざに、『悪は悪人から出る』と言います。わたしは手を下しません。15イス
ラエルの王は、誰を追って出て来られたのでしょう。あなたは誰を追跡されるのですか。
死んだ犬、一匹の蚤ではありませんか。16主が裁き手となって、わたしとあなたの間を裁
き、わたしの訴えを弁護し、あなたの手からわたしを救ってくださいますように。」
17ダビデがサウルに対するこれらの言葉を言い終えると、サウルは言った。「わが子ダ
ビデよ、これはお前の声か。」サウルは声をあげて泣き、18ダビデに言った。「お前はわ
たしより正しい。お前はわたしに善意をもって対し、わたしはお前に悪意をもって対した。

【使徒書日課】ガラテヤの信徒への手紙　6章1～10節

1兄弟たち、万一だれかが不注意にも何かの罪に陥ったなら、“霊”に導かれて生きている
あなたがたは、そういう人を柔和な心で正しい道に立ち帰らせなさい。あなた自身も誘惑
されないように、自分に気をつけなさい。2互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこ
そ、キリストの律法を全うすることになるのです。3実際には何者でもないのに、自分を
ひとかどの者だと思う人がいるなら、その人は自分自身を欺いています。4各自で、自分
の行いを吟味してみなさい。そうすれば、自分に対してだけは誇れるとしても、他人に対
しては誇ることができないでしょう。5めいめいが、自分の重荷を担うべきです。6御言葉
を教えてもらう人は、教えてくれる人と持ち物をすべて分かち合いなさい。7思い違いを
してはいけません。神は、人から侮られることはありません。人は、自分の蒔いたものを、
また刈り取ることになるのです。8自分の肉に蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、霊に蒔
く者は、霊から永遠の命を刈り取ります。9たゆまず善を行いましょう。飽きずに励んで
いれば、時が来て、実を刈り取ることになります。10ですから、今、時のある間に、すべ
ての人に対して、特に信仰によって家族になった人々に対して、善を行いましょう。

【福音書日課】ルカによる福音書　7章36～50節

36さて、あるファリサイ派の人が、一緒に食事をしてほしいと願ったので、イエスはそ
の家に入って食事の席に着かれた。37この町に一人の罪深い女がいた。イエスがファリサ

イ派の人の家に入って食事の席に着いておられるのを知り、香油の入った石膏の壺を持って来て、38後ろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った。39イエスを招待したファリサイ派の人はこれを見て、「この人がもし預言者なら、自分に触れている女がだれで、どんな人か分かるはずだ。罪深い女なのに」と思った。40そこで、イエスがその人に向かって、「シモン、あなたに言いたいことがある」と言われると、シモンは、「先生、おっしゃってください」と言った。41イエスはお話しになった。「ある金貸しから、二人の人が金を借りていた。一人は五百デナリオン、もう一人は五十デナリオンである。42二人には返す金がなかったので、金貸しは両方の借金を帳消しにしてやった。二人のうち、どちらが多くその金貸しを愛するだろうか。」43シモンは、「帳消しにしてもらった額の多い方だと思います」と答えた。イエスは、「そのとおりだ」と言われた。44そして、女の方を振り向いて、シモンに言われた。「この人を見ないか。わたしがあなたの家に入ったとき、あなたは足を洗う水もくれなかったが、この人は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれた。45あなたはわたしに接吻の挨拶もしなかったが、この人はわたしが入って来てから、わたしの足に接吻してやまなかった。46あなたは頭にオリーブ油を塗ってくれなかったが、この人は足に香油を塗ってくれた。47だから、言っておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」48そして、イエスは女に、「あなたの罪は赦された」と言われた。49同席の人たちは、「罪まで赦すこの人は、いったい何者だろう」と考え始めた。50イエスは女に、「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」と言われた。

《油注がれた人》【こども説教のために】

主イエスがある人の家で食事をしていると、一人の女の人が入って来て、近寄り、主イエスの足に香油を塗り始めました。主イエスの時代、大切なお客さまに香油やオリーブ油を塗って差し上げることは、よくあることだったようです。それは、古い時代に王位に就く者が「油注ぎ」の儀式を受けたということと関係があるのかもしれません。

主イエスの先祖には、ユダの国の王たちがいました。ダビデもその一人です。ダビデは、王家に生まれたわけではありませんでしたが、少年時代のある日、預言者サムエルが訪ねて来て、彼に油を注ぎました。それは、将来、ダビデが王になるしるしでした。

そのとき、イスラエルの国の王はサウルでした。ダビデは、サウル王に仕える家臣となりましたが、次第に王から命を狙われるようになりました。逃げた先の洞窟で、追ってきたサウル王を殺す機会を与えられました。けれども、ダビデは、仲間たちに「わたしの主君を殺してはいけない」と言いました。「この人は、**主が油を注がれた方なのだ**」（サム上 24:7）と言ったのです。サウルも王となるときに、ダビデのように油を注がれていたのです。ダビデは、サウルにも同じことを告げました。それを聞いて、サウルは、泣いて答えたのです、「**お前はわたしより正しい**」と。

「この人は罪深い」

前任地教会に仕えていたとき、最初から最後までずっと付き合い続けた「招かれざる常連客」がいました。わたしどもと変わらぬ年代の青年A君は、時折り、ふらっと日曜日の礼拝や集会にやってくるのですが、必ず誰かに喧嘩をふっかけてしまい、大騒ぎの末に帰って行くことが常でした。地区の牧師会や地域の超教派の牧師・司祭の集まりでは、彼のことを知らない者はいませんでした。彼は、どこの教会に行っても、同じようにトラブルを起こしていたのです。いくつかの教会では、彼を出入り禁止にしていました。

わたしの前任地教会に彼が来るようになったのは、わたしが赴任する前からでしたが、彼がトラブルメーカーであることを知っていた前任者は、ご自分で関わることをせず、若い男性信者らに対応を任せていたのです。彼は、そのことも気に入らなかったようで、わたしが赴任してからも、教会にやって来ては、若い男性信者らを見つけては突っかかって行く、ということを繰り返していました。見かねたわたしは、男性信者方と彼を引き離すようにし、できるだけ自分で直接、彼の相手をするように心がけたのです。とは言え、それでうまく収まったわけではありません。彼は、相変わらず何だかんだと訴えては暴言を吐くのです。わたしも、当時は牧師としての経験もまだ少なく、彼の訴えを真に受けては、延々と議論とも言えない口論に付き合っていました。そして最後には、彼は腹を立てたまま帰って行くのです。

あるとき、彼は「金を貸してほしい」と言ってきました。彼は、派遣の日雇い仕事をしていましたし、実家暮らしでしたから、生活費に困ることはないはずでした。聞くと、病気治療のためにある教会の奉仕会から受け取った金銭を飲食に使ってしまった、というのです。病院には行きたいので、診察代を貸してほしい、と。わたしは、金銭を貸しても、また飲食に使ってしまうと考え、彼の通院に同行し、診察代を立て替えてやることにしました。そのようなことが、何度か続きました。彼は、治療費を出してくれている教会には黙って、何度もわたしのところに依頼に来ていたのです。そうこうしているうちに、彼は、その治療費を出してくれている教会で、洗礼を受け、信者になりました。自分が騙し続けた教会が、どこまでも自分のことを受け入れてくれていることを、彼なりに受けとめた結果だったのでしょう。

彼のために立て替えた金銭が戻って来ることはありませんでした。それを請求もしませんでした。洗礼を受けた教会で、彼が自分のしたことを白状したのかどうかも知りません。わたしが彼にしたことは、善意によるとは言えないことです。善を行ったとも思いません。むしろ、彼の悪に加担しました。それでも、わたしは、彼が洗礼を受け教会につながったことをよかったと思っています。残念ながら、彼は数年前、事故で亡くなりました。

「善を行いましょう」

旧約の物語。ダビデは、千載一遇の機会を得ながら、サウルに手をかけませんでした。彼は、百戦錬磨の兵士です。軍団司令官として、多くの敵を手にかけてきたことのある者です。サウル一人を殺さなかったとして、ダビデが平和主義者だとは到底言えませんし、彼が犯してきた殺傷の事実を覆えるわけでもないでしょう。しかも、このときの判断は、ダビデを再び窮地に追いやるのです。このとき、ダビデに対して「**お前はわたしより正しい**」と言い、「**お前はわたしに善意をもって対した**」と言ったサウル王は、にもかかわらず、後日再び、ダビデの命を狙う行動に出たのです。結果的に殺されなかったからよかったものの、そして、最終的に、サウル王が王子ヨナタンと共にペリシテ軍との戦闘で戦死することによってダビデの命が狙われることがなくなったからよかったものの、将来、ユダの国の王、またイスラエルの国の王になろうという者としては、ダビデの判断は、危ういものだったと言わざるを得ません。けれども、そうであればこそ、聖書はわたしたちに、このダビデという人の物語を語って聞かせようとしているのでしょう。

ファリサイ派の人シモンが、食事を共にするために主イエスを自宅に招いたのは、善いことでした。人を食事に招くということは、だれもができることではありません。しかし、それができる者には、そうすることが求められたでしょう。それは、だれもが認める善いことだからです。ただ、シモンは、ときにファリサイ派の主張に批判的であることが知られていた主イエスを招いたのです。シモンには、勇気が必要だったでしょう。仲間たちは、表向きは批判しないかもしれませんが、陰口を叩くかもしれません。

そのシモンにとって、食事の席に招かれざる客が入ってくるのは、想定外だったでしょう。自分では決して食事に招かないであろう、いわく付きの女性です。彼女は、主イエスの足もとに近寄ると、足をぬらして拭き、香油を塗りました。家に招かれた人のために、善きことをしたのです。

シモンも、善いことを為そうとしました。香油を塗った女も、善いことを為そうとしました。ただ、善いことを知っていても、善いことを為そうと願う者を受け入れられるとは限りません。人の罪を見てしまうからです。過ちを見てしまうからです。それどころか、敵意さえ見えてしまうからです。

それでも、善が為されるところで、何かが変わり始めます。シモンは、すでに、その女を家に上げたのです。大きな一歩です。主イエスをお迎えすることで、変わり始めたのです。赦されることの意味を知り始めたのです。

このお方も、ご自分が「**多くの罪を赦されたこと**」をご存じです。「油注がれた者＝キリスト」として、同じ「油注がれた者」らの「罪の赦し」を信じておいでなのです。だから言われます、「さあ、**安心して行きなさい**」。